



奇怪伯爵のオタ・ カル漬け丼3

韓国のアキバ・ハムニダ

奇怪伯爵

韓国にオタク文化はあるか

職場旅行で、観光ソウル行きが決定。

オタク的性格の僕が団体旅行を望むはずもなく、法事理由で速攻に断るつもりだった。念のため内容を聞くと、2泊3日のほとんどが自由行動だった。

自由。

ああ、なんという素晴らしい言葉。

これを獲得するために、一体何人の努力と犠牲があったことか。

僕は韓国に一度行ったことがあるが、その時から数年以上の時を経ている。

当時は僕が希望するもの＝オタク的要素が皆無な国だったが、最近の発展をみればきっと著しい変化があったと予想できる。

韓流スターは定着し、大量のドラマDVDも発売されている。

KARAや少女時代の出現で、男性陣もヒートアップ。

ネットで調べたところ、韓国のアキバもあるらしい。

アキバ。

ああ、オタクの聖地。

ここで、僕に疑問が生じた。

韓国オタクグッズとはいかなるものか？

まだ見ぬキャラクター。映画。漫画。ゲーム。

あれだけ観流が入ってきても、僕のツボ的作品は極めて少ない。

いや、一般ウケしないだけで、現地には無数の低級が蔓延っているかもしれない。

これは、行ってみる価値ありそうだ。

その反面、不安もある。

職場では、オタク気質を封印してきた自分。

動くのであれば、完全に一人で動かなければならない。

できるのか？

超がつくほど小心者の僕だ。一抹の不安がよぎる。

前回の訪韓では、同行者がいた。今回は、いない。

会社の者には分らぬよう、闇に紛れて行動しなければならない。

韓国は何語だ？ハングル語？全然知らんぞ。

極めてリスクな選択。

思えば、海外に行く度にオタク的店めぐりをしてきた。

香港のゴールデンタワー。

サンタモニカ、ラスベガス、フロリダ、ロサンゼルス of 玩具屋めぐり。

台湾の光華商場。

自分で探し当てたわけじゃない。

本やネットで調べ、その記事に基づいての旅。

先駆者の足取りを、ただ追ったにすぎない。

それでも、これらの経験は、心の勲章となって君臨している。

自分で開拓できるほど、僕は積極的ではない。

なにしろ、僕は日本においてさえ、新しい店に入るのが苦手なほど気が小さい。

ひょっとすると、満身に店に入ることもできないかもしれない。

しかし……。

まだ見ぬ韓国ホラー映画があるかもしれない。

まだ見ぬ格闘映画があるかもしれない。

伝奇アートやPCゲーム。漫画。

数年前に買ったゲーム雑誌には、まさしくツボ的怪奇ゲームの記事が掲載されていた。

いまや、市場は熟成期に入っているかも……。

むうう。

これは、行くしかない。

小心者よ、再び韓国を目指せ。

天竺を目指した三蔵法師のように、僕の心は遥かなる目的地を夢見ている。

目指すは韓国の秋葉、龍山（ヨンサン）。

機内食の思い出

今回搭乗するのは、韓国系航空会社。

前回も同じだったので、二度目の利用となる。

実は、その時の機内食体験が軽いトラウマとなって残っている。

当時のメニューに、かなりの量のキムチが含まれていた。

ここ数年、僕はキムチに興味を持ち、原材料を確認して食べるようになった。

(沖アミ、塩辛、カキ等が入っているとコクがある)

しかし、最初の韓国訪問では全くの素人状態。

機内食で出たキムチの美味さが、僕を虜にした。

尋常でない量が供されたのも問題だが、それを平気で平らげてしまった。

それどころか、残したツレの分までもらった。これが、後にトンデモない事態を引き起こすとも知らず。

賤しさ全開、サイクロン。

僕の失敗は、いつもここから。

空港到着後、免税店にて買い物というオタクには全く興味ない行程をこなし、梨泰院にあるホテルにチェックイン。

この時、日はすっかり暮れている。

あまりに暗いホテル周辺。街灯もないよね～。

海外とは、つねに危険に満ちたところ。

稀代の小心者である僕は、当時はとても周囲の探索には踏みきれなかった。

闇は、犯罪の巣窟と化す。

特に危険のエリアではなかったが、用心を重ねるにこしたことはない。

とりあえず、日の出を待って動くのが得策と判断した。

実は、この決断がマズかった。

とりあえず、就寝。

しかし、その2時間後、体内の異変が僕を目覚めさせた。

猛烈な空腹感。まるで胃を絞られているよう。

例えるなら、エア・ストマック・クロー状態。

嘔吐感も伴い、僕は酸っぱい胃液を吐き出す。

喉が、焼けるようだ。当然、水が欲しくなる。

しかし、安ホテルの冷蔵庫には何も入っていなかった。

館内に自販機も売店もなかったはず。

かといって、水道の水には抵抗がある。

腹を下すのは嫌だ。

未知の苦痛が、僕を襲う。
それは、胃液を吐いたぐらいでは、到底治まらないものだった。
フロントに連絡しても、多分言葉が通じないだろう。
それに、何と説明すれば良いのか。キムチの食べ過ぎ？
韓国人の呆れ顔が目には浮かぶ。
そうだ。僕は韓国に来てまで、恥をさらすわけにはいかない。
苦痛よりプライドが勝った。
よし、死ぬなよ、自分。とりあえず、朝までの辛抱だ。

むうっ。
ぎっ。
ぐえっ。
ごほっ。
うげえ。

数時間、耐えた。
その間、眠れず。
苦痛との激闘は続く。
韓国の空が、白くなった。
朝だ。朝がやってきたのだ。
それと共に、苦痛はようやく沈静の兆しを見せ始めた。
まさか、韓国の夜明けをみることになるろうとは。
そして、ある映画の場面が思い起こされた。
壮絶なる死霊との闘いの一夜。
その夜明けシーンは、まさにこの状況にピッタリだ。
『死霊のはらわた』。
僕は、ブルース・キャンベル演じるアッシュと同様の経験をしたのだ。
もっとも、こちらは死霊ならぬキムチだったが……。

と、そのような過去があって、今回の機内食にも相応の心構えで臨んだ。
レッスン1。キムチを食べすぎるな。
それを無視した時、僕にはまた死霊の一夜が訪れる。
知は、最大の防御なり。
得意顔で機内食をオープン。
あれっ。

そこに、あの毒々しいレッドの食品が見当たらない。
甘い味つけの、牛肉ちゃんが鎮座しているだけだ。
まさか、僕と同じ発病者が多発して、廃止になったのか？
それとも、単なる匂いの問題か？
はたまた、フライトが昼便だからか？
様々な理由を考えるが、真相は定かではない。
ただ、これだけは言える。
これならば、僕の上に死霊は訪れまい。
あの時、死霊（＝キムチ）との闘いは、終わったのだ。

団体旅行の1日

ソウル・金浦空港到着。

トイレ、両替を済ませ、ゲートを出ると皆がカメラを持って待ち構えている。

ガイドさんに尋ねると、上野樹里さんが出てくるらしい。

むうん、大河ドラマ真っ只中の女優に会えるとは、何たる強運。

この旅行、さい先良かね。

上野効果でテンション上がった一向は、バスで市内へ移動。

ガイドさんの口から梨泰院の地名が告げられ、そこで昼食を摂るらしい。

梨泰院（イテウォン）。

前回、宿泊したホテルがある地域。

そうだ、僕が死霊（＝キムチ）に苦しんだホテルがそこにある。

一人緊張の面持ちで、到着を待つ僕。

バスは件のホテルを少し通りすぎたところで、停まった。

近い。あまりに近すぎる。

僕の想いを余所に、一向はホテル地下のレストランへ入店していった。

席に着くと、そこには数種類のキムチが既に並んでいる。

キムチはどれも味が良く、箸が進む。

しかし、僕は知っている。決して暴食してはならない。

見ると、同僚が調子に乗ってキムチを大量に食べている。僕は蔭でほくそ笑む。

君は今、死霊復活の呪文を唱えつつあるぞ、と。

メインの料理は、カルビタンだった。

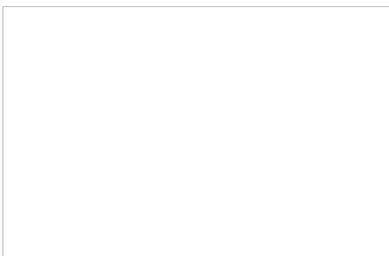
肉、ゴロゴロ。柔らかな噛み応え。

そして、あっさりながらも味が滲みこんだスープ。

澄んだ奥に、ほのかなコク。

これにご飯・キムチを交互に食べる。

団体メニューなれど、かなり満足だった。



満腹の皆を乗せたバスは、今度はロツテ免税店へ立ち寄り。

何と、買い物時間は1時間もある。

ブランド物に興味のない僕にとっては、苦痛の時間だった。

しかし、ここの免税店はデパートの高層階にある。

つまり、下に行けば、普通のデパートになっている。

僕は、一気に地下へ移動。

そう、デパ地下は食べ物の宝庫。

早速、韓国食事情の調査を開始した。

結果は、日本と同じような作りで、値段も同様。ただし、円高な分、安く感じられる。

高価なものは、アワビ・蟹の盛り合わせセット（約15,000円程度）や牛肉の詰め合わせ。

ケーキ300円～500円程度。

握り寿司（20貫。ネタはタイが中心）800円程度。

日本酒・久保田 千壽約3000円。

土曜の午後は、なかなかの混雑。

こういうの買って、ホテルの部屋で食べるのも一興かと。

デパ地下探索にそれなりの手応えを感じ、あっという間に集合時間となった。

夕食は、社員皆さん合同で。

韓国宮廷料理をスタイリッシュにアレンジした店が選ばれた。

何とも独創的な料理で、どちらかといえばフレンチに近いかも。

しっかり印象に残り、皆も満足の様子だった。

その日は、ホテルに戻り、MTV見ながら就寝。

とり憑かれたかのように眺める僕。

同僚は、三次会へ出掛けている。

腹が一杯で、とても飲み直す気にはならなかった。

異国の地で見るとMTVは、なかなかオツなものだ。

そして、明日はいよいよ龍山だ。

2日目の目覚め。

睡眠たっぷり、気分爽快ゼーっとと水木の兄貴真似も飛び出すくらいの朝を迎える。

天気予報では、本日雪。

鉛色の空ながらも薄日が射し、降るのは夕方か。

朝食も早々に済ませ、我ホテルを出発す。

宿泊先コリアホテルから歩いて3分程度で地下鉄駅入り口を発見。

切符売場で多少の戸惑いを見せつつも、無事乗車に漕ぎつける。

地下鉄乗ってしまえば乗り換え無しの数駅で龍山駅だ。

車内は、まばらで空いていた。

端に座っていると、突然オジさんがデカイ声で喚きだす。

出たよ。どこにでもいるんだな、この手のオッサン。

危害があるとマズいので、僕も格闘家モード（餓狼伝風）に気分切り替え。ぬうっ。

いつでも、獣性を引き出せるようにしておけ。

オッサン、かなりの大声だが、その表情は笑っている。

むう、楽しいか。

しっかり観察したところ、オッサンは乗客に靴のクリームを販売したいらしい。

皮靴を放り投げ、ジェスチャーしてみせる。

宙を舞った皮靴は、電車の床に音を立てて落ちた。

どうやら、ちょっとやそとの衝撃なら、このクリーム塗っておけば防げるというアピールらしい。

僕と目が合いそうになったが、咄嗟にその視線を外した。

むう。話かけるなよ、オッサン。

一通りの説明終わり。誰も買わんよと思っていると、何と購入者が出現。

こちらもまた、中年のオジサンだった。

そんな得体の知れないモノ買っちゃって。

ちょっと蔑んだ目で見てしまう僕。

ところが、おじさんは満面の笑み。

これは掘り出し物だ！

そんな内なる声が滲み出てきている。
需要と供給。これが商売の基本。
彼らは、その基本に忠実であっただけ。
むう、いつの間にか荒んでいる自分。
突然の車内販売に、人生を考えさせられてしまった。

結局、餓狼モードも意味なく、列車は龍山駅に到着。
改札を出ると、予想外に広い駅構内。
見まわすと、出口が幾つもある。
事前のネット調べでは、その情報は皆無だった。
とりあえず、近くの出口から外へ出る。

駅の出口は、建物2階になっているようで、1パークモールというショッピングモールとも直結している。
一見しただけでは構造が理解できず、何度か同じところを行ったり来たり。
もっと簡単に電気街が見つかると思っていたので、これには焦った。
ただ、1パークモールにレストラン街があること、メガブックスという本屋があること、ガンダムの存在を知らしめる店の広告があることを発見。施設も綺麗で、いざという時の避難トイレも確保できそうだった。
頼もしいぞ、1パーク・モール。
幸いなことに、雪もまだ降っていない。
天は、僕に味方したらしい。

龍山を歩く

結局、駅の構内およびパークモールの往復を20分くらい繰り返した。

建物に囲まれて、視界が開けていないのが原因だった。

ちょっと寂れた方向へ歩き、ようやく電気街らしき建物を発見する。

見れば、空中通路のようなものが伸びていて、これがターミナル電子商街に直結しているのだった。

うおお、まもなくだぜい。

日本の秋葉に行くのと同じ格好の僕は、背中のリュックを担ぎ直し、通路を早足で歩いた。

まずは最遠の電子ランドへと向かう。

そこから駅方向に戻ってくれば、効率良いと思ったからだ。

まだ雪が片隅に残る道を、ひたすら歩く。

駐車場っぽい道や、薄汚れた犬2匹がほぼ放し飼いになっている敷地など、緊張感には事欠かない。

そして到着した電子ランド。

事前情報では、大型CDショップやゲーム機、映画館まであるという。

しかし、そんな大型店舗にも関わらず、なんか寂れた雰囲気。

鉛色の空も相まって、冬のリビエラって感じ。

ひょっとして、営業していないのかと思いきや、ドアは開いている。

時刻は11:10。う～ん。実は、帰国してから、隔週日曜定休の店が多いことを知る。

とりあえず中に入るものの、客の姿がほとんどない。

これだけの巨大店舗のくせに？

店員も暇そうにしている。しかし、僕に声を掛けてくる店員は、ほとんどいない。

とりあえず、店内の案内もなく、何がどこに売っているかも分からない。

手当たり次第に、回ることにした。

2、3階は家電やパソコン等。

各売り場がショーケースのあるブースのようになっており、その中に店員がいる。

見ようとすると、店員に限りなく接近することになる。

僕は、買わないのに店員と話すのが嫌なので、通り過ぎる僅かの間に展示物をチェックする。

これらのフロアに、オタク物発見できず。

4階に移動し、CDショップ発見。

正規品を扱う店のようだ。K-POP、洋楽、ハリウッド製映画のDVDが売られている。

店の規模は、日本の百貨店に入っているCD屋といった感じ。

韓国オリジナルの映画は、見当たらず。

セールで洋楽北欧ヘヴィ・メタルのCDが4900ウォン（400円程度）だった。

あまりメジャーでないアーティスト数組。

この後、モデルガン、ゲーム、映画館を発見も特徴見い出せず。

僕は、移動を決意した。

電子ランドを後にした僕は、北の元暁電子商街の前まで行き、どう考えてもオタク物は無からうという外見にあっさり探索を諦め、東へと移動した。

道路の両側に小さな電器店が点在しているが、どこも営業しているのか、いないのか、分からないくらい活気がない。

日曜の昼なのにこれか？

ああ、秋葉原の賑わいが恋しい。何よりも、適度の人ごみは必要なのね。

不安感にさいなまれながら、電子街では東端にあたるソニンプラザに到着。

このあたりは、露店が立ち並び、活気づいている。

おお、これだよ。この雰囲気だよ。

待ち焦がれていた街の顔。

食べ物を売っている店もある。秋葉原なら、ドネルケバブといったところか。

そして、数多くあるDVD屋。

ジャケットのみアルバムに入れられており、客はそこから気に入った映画を店員に言うらしい。

正規品でない確率、かなり高いです。買ってないから分かりませんが。

ちなみに、料金等の表示がないので、ハングル語できない僕には値段を確かめる勇気がなかった。

聞いたら最後、僕は確実に商品を買ってしまっただろう。

それも、日本で手に入るハリウッド映画作品を。

露店を一通り冷やかし、ソニンプラザの中へ。

小さな店が所狭しと軒を連ねていますが、営業していない店も多い。

2階以上は、完全休業状態。

シャッターの閉まった店舗が並び、不気味な空間と化していた。

スティーブン・セーガル風にいえば、『沈黙の店舗』。

□

テコンVを発見

アキバの雰囲気を多少味わったものの、まだまだ消化不良。
というか、何の収穫もない。
そして、とうとう雪が降ってきた。
気温も下がって、僕の気力・体力も低下の一途をたどる。
ソニンプラザからターミナル電子商街へ、諦めの移動を開始。
その途中で、地下に店が活気づく建物を発見。
一瞬躊躇するものの、突入を試みた。

そこは、ゲームソフトの店がひしめく秘密の地下街。
プレステ2やX-BOXらしきソフトが山積みになっている。
これまでの雰囲気とは明らかに違い、通り過ぎる店ごとに店員に話しかけられる。
おそらく、外国人客が頻繁に訪れるのだろう。
しかし、今の僕にプレステ2のゲームを漁る気力はない。
ちらりと見たそれは、日本語が書かれていた。
日本のソフトを探しに来たわけではないので、僕はどんどん店を通りすぎていく。

結局、店のほとんどが同じようなゲームソフト屋で、僕は大いに落胆した。
突き当りの、地上への階段を昇る。
その壁面に貼られたポスターに、目が留まった。
おお、ジーザズ。
その勇姿、『テコンV』ではないか。
日本の有名ロボットに似た外見ながら、テコンドーを駆使して闘うという韓国産スーパーロボットアニメ。
そのフィギアのポスターが、目立たぬように貼られている。

僕は踵を返し、再度階段を降りた。
店は、すぐに分かった。
ガンダムなどのプラモデルが置いてあったのだ。
この店に間違いはない。

家族経営的店で、店員の他に明らかに客でなさそうな人物たちが店舗の半分を占拠していた。
その騒ぎに紛れて、僕は潜入を試みた。
所狭しと置かれた商品をチェックしつつ、人気のない棚へ移動していく。
やはり、ガンダム商品が多い。

そして、ついに見つけたテコンVフィギア。

シンプルで飽きがこないデザイン。

僕の子供時代、オタクDNAに埋め込まれたスーパーロボット『Z』を彷彿させるフォルム。

予想以上に大きな箱入りのテコンVを、僕は今、手にしている。

これを買うかどうか。

新たな悩みが、鎌をもたげた。

なんと、値段がついていない。これは、いくらなのだ？

まさか、ハングル語で聞かなければならないのか？

店のおばちゃんが、僕の存在に気づいた。

ちょっと微笑みながら、近寄ってくる。

むう、来るな。まだ迷っているのだ。

しかし、おばちゃんの歩みは止まらない。

僕はテコンVを元に戻すと、他の商品を見るふりをして、おばちゃんとの距離を保った。

ここで、僕に考える余裕ができてしまった。

テコンVの造形が、思った以上に整っている。

これは、日本で作られたものではないか？

不意にもたげたテコンV日本製造疑惑。

韓国産でないとしたら、買った僕はオマヌケの何者でもない。

日本製をわざわざ韓国で買ったヤツ。

しかも値段交渉で高額で買ってしまったヤツ。

そのようなレッテルが貼られてしまうのだ。

それに値段も分からないし。

箱でかいし。

リボルテックの可能性あるし。

マイナス思考が、温泉の如く湧出。

後ろ髪を引かれるつつ、僕は地下街を後にした。

さらば、テコンV。

お前をモノにできない。なぜなら、お前はあまりにシンプルだったから。

ランチはIパークモールで

(※ここに文章を記入してください。)

雪が、本格的に降り出した。

気温の下がり方も著しい。

龍山探索も困難な状況に陥ってきた。

選択肢は、駅に直結したIパークモールの探索しか残されていない。

ついに、移動を決意する。

そして、それは僕の敗北を意味していた。

最期に見た一筋の光明。

それは、初めて通ってきた空中通路が連結したビルの1階にあった。

入口付近に並べられた大量のDVD。

きちんと、ケースがついている。

僕は、手当たり次第にタイトルを確認した。

やはり、ハリウッド作品が多い。

そして、いよいよホラー映画の群れを発見した。

胸をときめかせた瞬間は、僅かだった。

一瞬、オリジナルかと思い、感動を覚えたジャケットも、良く見ればパン兄弟監督の『ジ・アイ』。

既にDVDは、所持している。

その他も、メジャー作ばかり。

アルバトロス『ウォー・オブ・ザ・デッド』を発見し、その逞しさに感心するも、有益な発見には至らなかった。

時間は13:30を過ぎていた。

遂に、Iモールまでの撤退を余儀なくされる。

モールの中の、レストラン街を散策。

韓国料理の店が多いが、どの店も大した盛況ぶりだった。

しかも、家族連れやカップルが多い。

そこに、一人リュックを背負った格好で入っていく勇気を、僕は持ち合わせない。

相変わらずの、入りやすそうな店探索に時間が費やされていく。

比較的入店が容易であろう店は、韓国側からみて洋食に分類される店だ。

韓国人にとって人気のある店は、やはり韓国料理。

日本のラーメン屋やロッテリアは、比較的空いている。

何度も、そこで妥協したくなる。
これらの店に入ってしまうえば、楽なのだ。
しかし、それでいいのか、伯爵さんよ。
内なる声が、僕を叱咤する。
せっかくの韓国旅行なんだぜ。普通、韓国料理だろ。
ええい、わかっている。
だが、僕には入り易さも重要なポイントなのだ。
日本においても、そうなのだ。ましてや、ここは韓国。
慎重になって何が悪い。
僕の葛藤は、ますますエスカレートするばかり。

結局、選んだのは『カレー・ポッド』なるカレー専門店風の店。
そんなのラーメンやファーストフードと一緒にじゃないか。
ごもっともでございます。
僕は自由にレストランにも入れない、ヘタレでございます。
これでも、精一杯の勇気を振り絞ったのでございます。
もう、これで堪忍しておくれ。
しかし、この哀れで愚かな選択は、思いもかけないファンタスティックな体験となったのだ。

午後2時というのに、店内はなかなかの盛況ぶり。
ファースト・コンタクト時（入店までに2、3回接近を試みていた）には、ガラガラだったはず。
。韓国は、遅いのかも知れない。

店員の案内で、一番端の席に通される。
これは、僕の大好きな位置だ。
居るのか、居ないのか分からない。スパイでもなくせに、目立たぬ席が心地よい。
窓が、広い。
雪に埋もれていく龍山の街なみが、目前に広がっている。
その光景が、素晴らしい。
ヘタレの僕は既に消え、気取ってメニューを開いた。
店員が緊張気味に、水をテーブルに置いた。
たぶん、学生のバイトだろう。
そうか、僕が外国人だから緊張しているのか。分かる、分かるぞ。僕も同じ気持ちだ。
僕は、ちょっとした余裕を感じた。

相手の弱さにつけ込む、姑息な優位性。実は、単なる客と店員の関係だが、ここはヘタレさを見せた者が敗者となる。

念入りにメニューを検討した。

写真でみる限り、ハンバーグ・カレーとシーフード・カレーが美味そうだった。

シーフードの方が具材が豪華。しかし、味は想像がつく。

では、ハンバーグは？

僕の思考回路に電流が走り、自己の利益のために仮説を導き出す。

ソウル→焼肉→肉→美味。ならば美味→ハンバーグ+カレー。

肉汁たっぷり。それがカレーのスパイスと相まって混沌の世界を創出する。

そのカレーを、雪を眺めながら食すのだから、たまらない。

迷いは消えていた。指差しオーダー完了。

さらに、ハンバーグ→肉→赤ワインという発想が浮かび、ワインまで注文。

おいおい、カレーに赤ワインかよ。

そういう声も聞こえてくるが、どうしても飲みたかったのだから仕方ない。

メニューでグラスワインを探す。それらしいのがあったが、Bottole of Wineの表記。でも価格は、どうみてもグラスワインだった。

グラスがボトルなら、ボトルは？

ふってわいた混乱に、僕は軽いパニックを起こす。

ええい。

間違えられては困るので、メニューを指さしながら口頭でオーダー。

『Bottole of Wine Please ……』

案の定、店員さんは怪訝な表情を浮かべ、『Glass of Wine?』と聞き返した。

『やはりか!!』

店側による巧妙なトラップ。僕は、きっと店の裏で笑いものになっているに違いない。

そうだよ、グラスだよ。だけど、メニューに書いてあるんだよ、Bottoleって。

そちらのメニュー表記が違うの。

心の中でそう叫んだ。

しかし、実際の僕は、オーバーアクションで頷き、しかも『イエス』なんて言ってしまった。

屈辱は、夕立のごとく、突然に。

それにしても、眺めが良い。

雪が降っていなければ、きっと感動も薄いだろう。

僕の日常生活では、滅多に見られない雪の量。

短時間しか降っていないのに、出発時とは街の様子が一変してしまった。



料理が運ばれて来る間、名誉と引き換えに手に入れた赤ワインが喉を潤す。
真白な雪と真っ赤なワイン。
いいぞ。全く予想できなかった展開だ。
これぞ、旅の醍醐味。
ああっ、僕は旅してるウ。
そして、舞い降りてくる雪のカーテンに重なるは、テッコンVの勇姿。
戻れば、まだ買うことができる。
しかし、日本でも売っているかもしれない。
葛藤が頭の中を駆け巡る。この選択は辛いぞ、マニア道。

とかやっているうちに、ついにハンバーグ・カレーが運ばれてきた。
すぐさま、ハンバーグにナイフを突き立て、口に入れる。
肉汁がドバァーっと、出ない……。
それどころか、ジューシーさが殆ど無い。
まさに肉のキャトル・ミューティレーション。
この仕業は、UFOか？
はたまた、先の店員か？
そういえば、昔の学校給食でこんなハンバーグがあったな。
わざわざ韓国で懐かしの味にご対面ということか。

肉質の違いに落胆するも、料理全体で捉えれば面白い味だった。
カレーは、タイカレーに酷似。
日本のドロリッチ感はなく、サラサラ感がある。
スパイスはしっかり。刺激的な辛さだ。
ライスは、日本のものと違いのない白飯。
ふと、紙のコースターに目を遣ると、そこにはタイ・キュージーヌの文字が！！
カレー専門店とっていたが、タイ料理の店なのか？

それにしても、メニューにカレーしかなく、写真を見る限りおよそタイカレーとは想像つかない

。

このモヤモヤ感、たまらなかった。

韓国の本屋

食事をしている間に、雪は勢いを増していた。

そのため、スニーカーでの歩行は極めて困難となり、探索範囲を縮小せざるを得なかった。

もう、DVDは諦めるしかない……。

UMA探索を諦めた探検隊のごとく名残は尽きなかったが、寒さと舞い散る雪の量には勝てない。

そこで僕は、1パークモール内の本屋へとターゲットを変更した。

本屋の売り場面積は広がった。

しかも、ビルの2フロアを占めている。

これなら、オタク物を発見できるかもしれない。

実は、数年前にソウルを訪れた時、僕は玩具屋の一つも発見できなかった。

その時は、幸いにもCOEXモールで巨大本屋を発見。そこでゲーム誌を買っている。

その中の特集記事に、韓国オリジナルっぽい、伝奇風RPGが掲載されていたのだ。

しかし、記事がハングル語のため、内容がさっぱり分からない。

それでも、おどろおどろしいタッチのモンスターがふんだんに描かれており、僕の関心を引くことになったのだ。

あれから、年月が経っている。

オタク業界は熟成され、甘美な芳香を放っているに違いない。

そのような淡い期待を、僕は持っていた。

逸る気持ちを抑え、手当たり次第に売り場を眺めていく。

ハードカバーが多く、それも結構分厚い本がメインを張っているようだ。

ようやく見つけた雑誌コーナーは、なぜか片隅にあった。

アルファベットで書かれた表紙。

輸入されたものかもしれない女性向けファッション誌がソコソコに置かれている。

雑誌が山のように置かれている日本と比較すると、雲泥の差だ。

しかも、ファッション誌以外のジャンルは極端にすくない。

そのような中で、1冊だけゲーム雑誌を発見。

ビニールに覆われ、決してやましい本ではないのだが、中を見るができない。

しかも、買って日本に持って帰るには、あまりに分厚く、そして重い。

それは、少年時代に買っていたPC雑誌『I/O』を彷彿させた。

表紙のみから判断しても、それほど魅力があるようには見えない。

散々迷った挙句、買うのは断念した。

隣のコーナーでは、漫画を発見。

日本のものが、9割以上を占めているようだ。もちろん、ハングル語バージョンである。

やはり、『ワンピース』あたりが人気といったところ。

お値段、約4,000ウォン（その時のレートで300円程度）。

漫画でも、コリアンテイスト溢れ、魅力ある画の作品は発見できず。

結局、オタク的本の発見は、これまでに終わった。

韓国女優やアイドルの写真集、グルメ雑誌、大衆紙。

そういったウケを狙える本が、ない。

僕から言わせれば、あまりに真面目すぎるぞ、韓国。

前回の訪問時より、オタク的発見が無くなっている……。

そのわりには、韓流は日本に流れ込んでいる。

K-POP、ドラマなどなど、韓流を楽しむためにハングル語を覚える女性までいるというのに、この文化ギャップは何なのだろう。

プロトカルチャー。

思わず、僕は超時空要塞言語を呟っていた。

正直なところ、韓国的発見はテコンVのフィギアのみ。

その他の娯楽的要素は、ガンダムの台頭ぐらい。

そして、ドラゴン・ボールが少々。

来る前は、韓国にある関連会社の話を同僚としており、ソウルで働くのも悪くないなどと発言していた。

今、考えれば、おそろしい発言だ。

僕がソウル勤務となったら、1週間で精神が破綻するにちがいない。

オタク・ジャンキーの生態である。

そして僕の龍山探索は、幕を閉じるのだった。

マシソヨ、すし定食

僕の2回目になる韓国訪問は、オタク的見地からいえば、ほとんど収穫のない旅となった。韓流の盛り上がりも、オタクとは無関係の次元で進んでいた現象だ。ホテルで見たテレビ番組も、心惹かれるものが皆無。MTVを見ても、セクシーさを売りにしたダンスばかり。日本でも盛り上がりを見せている少女時代しかりKARAしかり。セクシーと、萌えは似て非なるもの。案外、セクシ部長は韓国で受けるかもしれない。そんな他愛もないことを、徒然に思ふ。

ふと懐かしむのは、台湾の出張。テレビをつけっ放しにしておけば、ヴィジュアル的に興味を惹くものが続出した。グルメ番組は、日本さながら。お笑い芸人がリポーターを務め、九份にある店を紹介していた。CMも面白く、MTVをみれば感性に合う良曲にも出逢った。なにより、今までアイドルにハマることのなかった僕が、王心凌（シンディ・ワン）に一目萌えしてしまう事実があった。彼女の『心電心』PVの衝撃は、僕の中に眠っていた何かを突き動かしたのだ。むう、これで良いのか、アラフォーな僕。

台湾で、どっぷり漬かった異国のオタク・カルチャー。僕は、それを韓国にも求めていた。しかし、現実は違う。テコンVからガンダム。その間に、変革はあったのか、なかったのか。ガンプラだけが山のように積まれた店内に、その痕跡を求めることはできない。ひょっとしたら、韓国にオタクはいないのか？ そのような疑問さえ感じてしまうほど、店を探すのが困難だ。それにしても、『リネージュ』等の韓国産オンライン・ゲームがヒットした記憶もある。謎が謎を呼び、もしかしたらオタク物は全てネット販売が主流なのではないかとの結論に至った。流石に、それを確かめる気力は、残されていないが.....。

最終日の昼、がっくり肩を落とした僕は、金浦空港で韓国での最期の食事を摂った。またまた、入る店がなかなか決められず、空港内を3周程歩くことになる。時間もなくなってしまい、結局フードコートに決定。いくつかある中から、寿司を扱った店を選択。

タイの刺身をコチュジャンで和えた丼に興味津津だったが、メニューにハングル語しか表記なく、注文できそうもなかったので断念。

注文口の暖簾に書いてある『魚すし定食』を指さして注文。

案の定、英語や日本語は通じなかった。

集合5分前に出来上がった『すし定食』の内容は、

握り寿司10貫（タイが6、エビ2、サーモン2）。

手巻寿司2個（共にとびっ子）。

ざるそば。

豪華3点のセットで、お値段10,000ウォン（当時のレートで750円ぐらい）。

注目は、なんといっても『ざるそば』だ。

ツユは、甘めで特に違和感はない。

そう、蕎麦に特徴があるのだった。

蕎麦といっても、蕎麦にあらず。これは、どうみても冷麺を蕎麦風に着色したものだ。

したがって、韓国冷麺をそばツユで食べている感覚。

微妙な違和感があるが、これはこれで面白い。

なんといっても、おばちゃんが差し出す時の、『お待たせしました。さあ、どうぞ〜』的なハングル語の口調が妙に優しく、勝手ながら寅さんに通ずる人情を感じずにはいられなかった。

韓国、あったかいかも。

オタクでなくてもいいじゃないか。

おばちゃんが、そう言っているような気がした。

添えられたワサビの緑色が毒々しい。

匂い的にはワサビだが、全然辛い。

ワサビまで優しいね、韓国。

奇怪伯爵のオタ・カル漬け丼3

<http://p.booklog.jp/book/20556>

著者：奇怪伯爵

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kkaiki0710/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/20556>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/20556>